

63 マルチエツロ・マルピーギの医学論

伊 藤 和 行

マルチエツロ・マルピーギ (Marcello Malpighi, 1628-1694) は、一七世紀イタリアを代表する医学者であり、解剖学者である。彼の研究の中心は、肺の毛細血管の発見や腎臓のマルピーギ小体の記述に代表されるように顕微鏡を用いた生体の微細構造の探究だった。

マルピーギの『遺稿集』(Opera posthuma, 1697) には、解剖学的研究が医学全体において果たす役割について述べた医学論が含まれている。その論考は、ボローニャ大学で彼の同僚だったズバラリア (G. G. Sbaraglia, 1641-1709) の『近年の医学者について』(Derecentiorum medicorum, 1689) に対する反論であった。ズバラリアは、匿名で出版したこの著作の中で、自らの立場を「経験医学」と規定し、マルピーギの「合理医学」とくに顕微鏡

を用いた解剖学的研究は医学者にとって無用のものであり、実際の治療に何も貢献しないと非難した。

このズバラリアの批判に対するマルピーギの反論は、

『返答』(Risposta alla lettera intitolata «De recentiorum medicorum...») という標題の下に著された。この中で、マルピーギは自らの解剖学的研究、とくに顕微鏡による微細構造の観察が医学において果たす役割を、ガレノスら古代の権威を用いつつ説いている。ここで彼の議論の基盤となっていたのは、徹底した機械論的自然観であった。マルピーギは、生体を微細な部品からなる機械との類似によって捉えている。「自然は、動物や植物において素晴らしい活動を営むために、その組織体を非常に多くの機械によって構成することで満足している。それらの機械は必然的に微細な部分からなり、素晴らしい器官を形成するように作られて配置されているが、その器官の構造と構成は、顕微鏡の助けなしには裸眼では概して到達できず、さらには非常に重要な多くのことが見逃されてしまう。」(Opere scelte di Marcello Malpighi, a cura di L. Belloni, Torino, 1967, p. 504)

よって大きく花開くことになるのである。

(京都大学文学部)

身体を構成する部分の構造と機能を「解剖学や、哲学、機械学〔力学〕」によって解明することを通じて「自然が働く仕方が理解され、生理学と病理学が基礎付けられ、次いで医学という学問の基礎が築かれる」(Ibid., pp. 512-5)のである。病気の治療も、故障した機械を修理する際に、正常に機能していない部分を特定し、さらに個々の部品が機械全体の機構の中で果たしている役割を理解した上で、障害を取り除くように行わなければならない。

その出発点となるのが、病気によって身体の各組織に一体何が起きているかを捉えるために、病死した患者の死体を解剖することから「自然が妨げられていないとき(すなわち健康時)と攪乱されているときに(病気時)と言われるのと同じであるが)働く原因や機械的な方法の知識」(Ibid., p. 516)を得ることである。

もちろんマルپیギの言うように機械学的説明だけによって病気の原因を説明することは不可能であり、彼自身伝統的な医学理論や化学理論の役割を認めていた。しかし彼がその重要性を説いた病理解剖は、一八世紀に入りモルガーニ (Giovanni Battista Morgani, 1682-1771) に